

経済学会第 588 回例会

2019 年 12 月 18 日

ジョブ・タスクと賃金格差

勇上和史

報告要旨

近年、日米欧の労働市場では、賃金分布やスキル別の職業分布でみた上位層と下位層の賃金や雇用が増加し、中位層の賃金や雇用が減少するという二極化 (polarization) 現象が観察されている。このように、スキルと賃金変化が一意に対応しない現象を解明する新たな分析枠組みが、Autor, Levy and Murnane (2003) を嚆矢とするタスク・アプローチである。ここでタスクとは、生産やサービスを生み出す労働活動の基本単位であり、労働者が保有するスキルは様々なタスクに適用されて初めて生産が実現する。タスク・アプローチは、なぜ中位層の雇用シェアや賃金が低下するのかについて有力な解答を与えるとともに、労働市場全体の賃金格差のみならず、様々な労働者グループ内・グループ間格差の要因分析に応用されている。ただし従来の研究では、利用可能なデータの制約により、職業別の各タスクの強度は時間を通じて一定であるという仮定、ならびに同じ職業内では個人レベルのタスク格差は存在しないという仮定がおかれていた。

そこで本研究では、主に第 2 の課題を克服するため、独自に収集したジョブ・タスクに関する情報を用いて、個人レベルの様々なタスクの強度と個人特性の間のシステマティックな関係の有無を検証する。併せて、個人レベルの各タスクの強度と労働者グループ間の賃金格差の関係を検証することを目的とする。このうち本報告では、男女間の格差に焦点を当てた研究結果を報告する。その結果によれば、個人レベルのタスク強度は、詳細に定義された職業内部の男女間の賃金格差を説明しうることで、それは、賃金と正の関係にある抽象的タスクの強度が、同じ職業内においても男性に比べて女性で低いことによっていることが明らかとなった。このことは、従来のタスク研究が明らかにした男女の職業分離のみならず、職業内のタスク格差が男女間賃金格差の淵源である可能性を示唆している。